【静岡別院のあゆみ】

■創建前史
駿河・遠江（とおとうみ）・伊豆の三国は元来真宗寺院の少ない地域だが、近年の調査で伊豆国に 1510（永生 7）年、本願寺第 9 代實如上人授与の絵像本尊が発見され、また蓮如上人の時代に、この地域に本願寺の教線が延びていたことが確認された。
東本願寺は、1602（慶長 7）年第 12 代教如上人の時に、徳川家康から京都烏丸七条の現在の地に寺地の寄進を受け、本願寺から分派した。
その後、265 年続いた徳川幕府が終焉を迎えて、15 代将軍慶喜以下多くの家臣は江戸を去り、駿河に移住した。
1868（明治元）年、新政府の政策である廃仏毀釈の中、第 21 代厳如上人（大谷光勝・1894 年 1 月 15 日没）は人々の願いを受けて、静岡別院の創建を発令した。

■創建
1871（明治 4）年に創建。この地、駿河に移住した徳川慶喜は、別院創建に尽力した旧幕府家臣の宮原木石（寿三郎）に師事することになる。宮原木石は、江戸末期の 1827（文政 10）年に今の岡山県井原市に生まれ、漢学・蘭学を能くし 1868（明治元）年、府中（静岡）学問所で二等教授となり、慶喜の師とも言われた人物である。そして仏教や真宗の教えを開華院法住師や南條文雄師に学んだ。
明治初期になり、慶喜の駿府（静岡と改称）移住に伴い、多くの旧幕臣たちも移住し、ここに厳如上人は、駿河・遠江・伊豆三国統括の静岡別院創建を発願したのである。
一方、宮原木石は徳川家と東本願寺との関係を調べるため、東本願寺に出入りして、真宗の教えに帰し駿府懸所（別院）創設に率先して尽力した。
厳如上人も彼に謝意の歌を送り、大きな期待を寄せる文章が園林文庫に伝わる。このようにして木石の懇念が実を結び、1871 年 3 月、静岡市葵区上石（かみごく）町の明泉寺の土地建物が本山に献納され、ここに別院としての遷仏遷座法要が執行され、後に遠江・伊豆の門末も崇敬区域となり、三国崇敬の静岡別院が創建されたのである。

■2 度の焼失
創建 19 年目の 1889（明治 22）年 2 月 1 日、31 時間燃え続けた静岡大火で、市内中心部 1 千余戸が灰燼に帰する大火災となり、別院・明泉寺ともに焼失した。翌年 7 月に、別院寺地を上石（かみごく）町より屋形町の現在の地に移転し、1891 年 1 月に再建の標示が出された。この時は、本山・東本願寺再建の最中であり、また大地震、日清戦争などにより再建が遅れ、1902（明治 35）年再建工事が始まり 1906（明治 39）年に完成した。
なお、1914（大正 3）年に宮原木石塔が境内に建立されたが、現在は規模を小さくして境内にある。
以来歴代輪番らの尽力により、静岡県崇敬区域の中心施設として活況を呈した。かつて、本山の総長（1956～1962 年）をされた宮谷法含師が、1910（明治 43）年 8 月に静岡別院番に赴任されている。
しかし、第 2 次世界大戦末期の 1945（昭和 20）6 月 19 日夜半、静岡大空襲により、またもや別院は灰燼に帰したが、木石塔のみが残った。

本尊・阿弥陀如来

■本堂再建
復興再建を願う関係者らの並々ならぬ努力により、1951（昭和 26）年 5 月 25 日に仮御堂の上棟式が行われた。1967（昭和 42）年に今の本堂が再建された
コンクリートの要塞を思わせる本堂は、古代遺跡（登呂遺跡）として有名な弥生時代の建築手法を模して、類例のない新様式によるものである。
さらに 1985（昭和 60）年に門徒会館が落慶し、ようやく別院の機能が回復され、今日に至っている。

■本尊・阿弥陀如来
静岡別院の創建が、厳如上人により願われたとき、当時、市内葵区の本通り 6 丁目の入江山西敬寺（現在は駿河区大谷）に安置されていた阿弥陀如来像が静岡別院の本尊として認められ、1871（明治 4）年 3 月に遷仏奉安された。
この本尊は、1615（慶安 4）年に三河の法蔵寺から西敬寺に移されたという記録があるが、2 度の火災のため詳しいことは分からない。本尊など宝物は木石塔内で火災を免れたといわれている。
鎌倉時代初期の大仏師・快慶（号・安阿弥陀仏）がはじめた「安阿弥様（あんなみよう）」という彫刻様式の本尊は、木像玉眼、高さ 95.8 センチ。推定製作年代は鎌倉中期といわれている。

〒420-0028
静岡市葵区屋形町 10
真宗大谷派静岡別院
☎054-253-1737

※『創建百二十年並宮原木石翁百回忌記念、静岡別院創立誌』を参考

2024 年度
（2024.4～2025.3）

静岡別院行事・法要表

―人と生まれたことの意味をたずねていこう―